

巻 頭 言



副支部長 石見 洋
(大形小学校 昭61年度)

「真価を問う問い」 ～心を揺さぶる出来事～

「先生、お久しぶりです。所属している消防団にテレビ取材が来たので、今度ぜひ観てください！」

先日、教え子から突然電話がかかってきた。電話をくれたのは、自分が新採用のころに担任した教え子なので、既に40歳後半である。その教え子が、近況報告してくれるとは実にうれしい。そして、そのまま、当時の思い出話に花が咲いた。教師をしてよかったと感じた瞬間である。

ときわ会は、創設150周年を迎えるにあたり、会員相互の「真価を問う問い」の交流を全会員で行うことを計画している。当支部では、全員研修会にて、OB会員の杉中宏様からご講演をいただき、それをベースに、各自が用意してきた「過去と現在に関する真価を問う問い」9問について小グループで意見交流を行った。

昨年12月、支部全員研修会に向け、「真価を問う問い」について自分なりの考えをまとめていたときである。「〇〇になって最も心を揺さぶられた出来事は？」と自問すると、やはり若い頃の出来事が浮かんできた。その中でも、新採用の3年間で印象深い出来事が多かった。

私は、新採用で1クラスしかない4年生の担任となり、そのまま5年生担任、6年生担任と持ち上がり、3年間の新採用を終えた。その学校は、総合的な学習の時間がスタートする前から、新たな試みとして、これまでの教科にないような学習活動を積極的に進めていた。そのこともあって、当時の自分は、「おもしろそうだ」と思いつくことに何でもチャレンジしていた。



歴史の学習の中で、子どもたちが、巨大な紙に奈良の大仏の顔を実物大で描き、校舎に垂れ幕のように掲示した。そして、クラス全員で当時の役割に扮しながら「開眼の儀式」を行った。また、お父さん方を集めて懇親会を開き、「校庭に竪穴式住居を作りたい。」と訴えた。その結果、建築士であるお父さんが設計図を作り、学校前の材木屋が材料をくださり、子どもたちとお父さん方みんなで、くぎを1本も使わずに1日ばかりで竪穴式住居を作り上げた。今、思えば、そこまでの教育的な意義があるのかと、恥ずかしくなってしまう。

驚くのは、これらの活動を許してくれた校長先生である。今と違う30年以上前のことだからという言葉で片付けてしまうことではないだろう。今の自分は、若い教師が、「やってみたい!」と言ってきたことに対して、「がんばれ!」と背中を押すことができているだろうか。ときわ会の「真価を問う問い」をきっかけに、深く反省させられた。

パワーはあるが、経験は乏しい。熱中できるが視野は狭い。そんな未熟なころに担任をさせてもらった教え子からのうれしい電話。ときわ会の一員として、当支部の会員が、「心を揺さぶる」ような教育活動を伸び伸びと進めることができる環境づくりを目指して努力しなければならないと決意を新たにさせてくれた電話だった。